

## ディスコグラフィアー収載

### ディスコグラフィアー 【2015No.28】 (HP 収載)

分類：CDR

作曲家：ベートーヴェン・モーツァルト

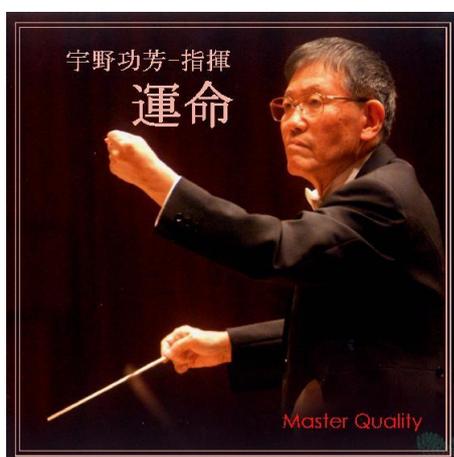
曲名：交響曲第5番「運命」・フィガロの結婚序曲

演奏：宇野功芳指揮 東京フィルハーモニー交響楽団

発売：インフラノイズ

No.：INF-5004

概要：



インフラノイズから待望のクラシックのマスタークオリティ盤が出ましたので、すぐさま購入しました。同社の説明によると以下のようなうたい文句がありました。

<http://art.pepper.jp/archives/002068.html>

- 1)CDR メディアは現時点で最高クラスの太陽誘電社マスター専用 CDR-74MY を使用、音質劣化の原因となるレーベル印刷は行っていない。
- 2)GPS クロックによるリマスタリングにて一枚一枚が等速度の手焼き仕上げ
- 3)未編集のオリジナル CDR マスターからの作成
- 4)普及型ミニコンポによる再生音が数百万円クラスのハイエンドオーディオと間違われるような現象も起こりえる。

また、宇野先生が近刊の著書の題名どおり、どれだけ「演奏の本質」を突いた演奏をされているか、インフラノイズがそれを忠実に製品化できたかどうかに興味を湧きます。

<http://audiokenkyu.sakura.ne.jp/wordpress/wp-content/uploads/2014/04/35a8aaa453839867b7b1025881dc78c0.pdf>

「付属する CDR の内容について」という説明書には、次のようなことも記載されています。

1)今回発売の CDR は 2008 年に榊ムジークレーベンから発売された宇野功芳指揮、運命+英雄の超高音質盤

2)収録曲のうちフィガロの結婚序曲と運命を選び出し、音質を最優先して未編集のマスターから曲目を選択

3) クロックの問題点などを見直し、最新の GPS クロックで未編集マスターからリマスタリングした結果、マスターと比較してもプロの耳でもどちらがマスターか区別が出来ないほどの驚異的な音質が得られた。

4)生演奏ではいくつもの楽器が重なってひとつになり、オーケストラ全体の音色となるが、CD の音は写真のように重なってしまった音がひとつの音色になって聴こえてしまう。一方、このマスタークオリティーCDR はいくつもの音が分かれて聴こえながら同時に重なって聴こえる不思議さが有る。

5)リマスターCDR には干渉する前の状態で個々の音として入っていて、再生するとスピーカーから音になって出て初めて生音のように空間で干渉して全体の音になるという感じで、音響理論で説明できる加音、差音による発生音の誕生に由来するものである。要約すれば、高精度のクロックや等速度の手焼き仕上げの結果、一つ一つの音が正確な時間軸のタイミングで記録されているので、結果として、再生後に空間で加音、差音として干渉し、全体の音が生まれるということでしょう。

一聴して分かることは、フィガロにしろ、運命にしろ、これはもう完全に「宇野 World」に誘い込まれた感じで圧倒されます。その誘いこまれ方が、上記の一つ一つの音が正確な時間軸のタイミングで記録されていることによる空間での干渉の結果、あたかも演奏会で聴いているように、全体の音が生まれるということに由来しているからでしょう。テンポの取り方、各パートを浮かび上がらせるフィーチャーのあり方、音量の上げ下げなどが、「宇野 World」の特徴で、こんなモーツルトがあつたのか？、こんなベートーベンがあつたのか？と、ある意味、「快演」とも「怪演」ともとれるような指揮者の考える「演奏の本質」が具現化された盤と言えるでしょう。そういった演奏の意図が上記の手立てで明確に分かるようになっていきます。

一方、「宇野 World」からちょっと引いて「覚めた耳」で聴きこんでいくと、マスタークオリティ盤というだけあって、各パートの演奏タイミングのずれや演奏技量も分かり過ぎるので、演奏者にとっては「怖い盤」とも言えます。

「宇野 World」に酔うもよし、冷静に演奏を分析するもよし・・・という興味ある盤と言えます。